

A 132 試験紙による味覚感度の夏期・冬期の比較とその要因分析
東筑紫短大 納身節子 清水智子 ○田代桂子
盛岡短大 森成子

目的 前報(S56)で、味覚感度は性・地域差による影響があることを認めた。試験紙の14枚の組合せは、個人の味覚識別の再現性があることの報告をした。今回は季節差をみるため、冬期の味覚テストと食生活調査を行った。その結果を分析し食生活成立の一要素としての味覚識別能力とその要因についての検討を行った。

方法 a) 対象 北九州市男子学生176名、女子学生342名、盛岡市女子学生231名
計749名、そのうち夏・冬期同一の対象は510名である。

b) 時期 夏期 昭和56年6月、冬期 昭和56年12月～57年2月上旬

c) 内容①自記式による食生活調査表で、対象の条件、摂食構造、摂取バランス尺度、Na食品、糖分と嗜好飲料、味つけの好み、喫煙の傾向を調査した。

②前報と同様の14枚の試験紙による味覚テストを行なった。

結果 a) 夏・冬期同一対象者個人の再現性の相関と誤答構造を分析した。
b) 夏・冬期の北九州市男女学生、盛岡市女子学生の3グループ別結果の比較。
c) 夏・冬期の食生活調査項目の比較をした。
d) 冬期の食生活調査と味覚テストを偏相関で因子分析した。
e) 冬期の3グループ別結果の比較をした。
f) 冬期の食生活に関する追加項目でのデータを3グループ別に平均値とモ検定により分析した。